



^ 13
3112
3



忠孝潮來府志卷之三

東都 談洲樓 焉馬著

諷

將碁盤ならあてもあぬがらへ碁盤で月が多ひ。

蛟龍と常に深淵の中に有。し 浅渚おたつ時ハ則漁網鉤者の患あり

とは宜なりけうね。九津大夫が行達知とされば。兎角すれうらとや。秋もたら

冬ももなりて。比と十二月民家へせじに師走月勤兵衛とにそく嘉例乃

煤ちらわとて。夜の内より娘ハち。家内の若女とのハ同出夜酒の酔

に。りもれごとく下女子侍ふいれきと。胴ふあぐれとりの戯とに競ひか

大檀那と後ふぼじと。奥坐舗へもれ。秘まきうらら笑つ。余ハ老人なり

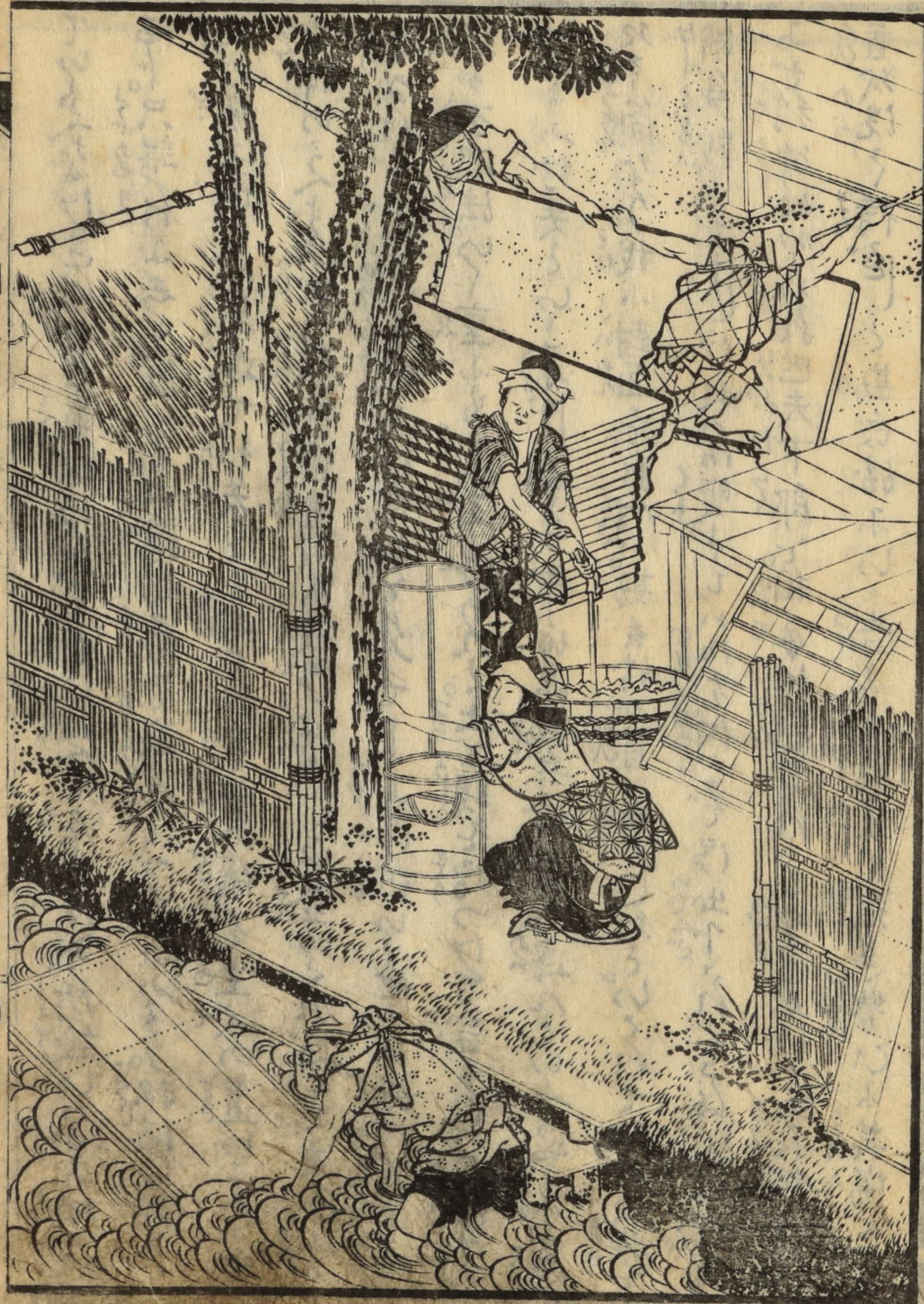
赦免くといのあづりれと。大勢まかすけと。ばあやまらあふんみださひて

長押へ斤よかかやし。所よみ障そののり。足次握らら伊平次くけり。

けん。滅も左津大夫とのあは此復のこは。房列の里見家へ一人の娘子とまは
に出されしが間もなや呼房へ封へけし。家と地代の滞りに振向我あは
ろく。房列の小藩お少しれ由縁あれば是へあはしめて行世しなり。跡さく
は娘も潮来へ勤まは公賣しとの沙汰。定めく借金の償役あひての
こゝろも。又借られ奴も非道の仕方。いへも辱れれ武士とて貧若
おせまれば能くの事やあはれに尋まらる人ありとも。知らばといひてなまられ
と名し。左津大夫とのあはの上。官とてめとあはれ故おしやけとすらち。秘
胸ぬさぐり。言葉もしでど當惑して。直さま我家へ入り。右の次女成語り
けし。勤兵衛も猶仰天して。こゝろおれらるやと母も呆れ。只伊平次
を尋ませ。その方が皆仕業ゆゑと女ごの恨かて。勤兵衛制して今さら
浮吃のつゝ益なれり。何は是もは子細あはれし。一やう房列へ立抵得と

相糾。平次といふ番頭の伊平次袖次。先づ下されし。私の不調法
去形。左津大夫とのあはれ。事なれば。言訳もあはれを令子。戻され
る。涙らねるなり。私により。記し。ゆとあはれ。右檀那。浮出のつゝ。万一凶
事。ゆゑは如何され。先私房列へ。入り。多あり。上。の事。や。
再三の顔ひ。ふせ。それより。早く用意。して。伊平次。房列。に。て。急。に。
上。聖。人。を。師。と。し。下。群。賢。と。友。と。す。仁。義。の。原。を。窺。礼。樂。の。緒。と。探。と。
獨。樂。し。む。左。津。大。夫。及。小。藩。に。閑。居。して。今。と。世。に。流。る。業。に。管。主。と。縫
て。ふ。ち。や。學。び。啼。音。成。る。に。春。生。ら。顔。も。咲。梅。の。白。ひ。も。け。し。く。又。海。邊。に
釣。を。無。魚。と。取。ら。た。の。み。と。は。我。身。に。程。を。知。る。れ。實。の。菜。畑。に。鋤。を。操。つ。て
畦。り。か。へ。し。唇。を。折。か。ら。二。人。連。み。て。伊。平。次。の。足。下。爰。に。ね。漸。く。に。それと
又。れ。よ。と。い。ま。わ。さ。て。左。津。大。夫。が。側。小。腰。成。か。ぬ。お。い。ん。と。それ。は。新。成。成。肯

忠孝明徳



ていつへなげとは。そこ氣味は。せし扱て居る。所詮いさへぬれ
 ぼ。只誤れよ。あふは。と。土邊。小居。あふ。ついで。私。は。い。れ。こ
 他。の。後。小。あ。は。先。達。て。終。失。と。り。上。と。れ。令。子。の。儀。を。主。人。の。置。け。ら。れ。て。
 長。押。の。之。より。出。故。を。得。違。ひ。の。段。沙。院。に。返。金。い。は。せ。し。と。主。人。あ。ら
 苦。ま。れ。も。此。間。不。快。お。は。せ。し。私。と。り。て。上。上。侍。い。せ。と。の。後。何。も。し。拙
 者。が。不。調。法。い。く。重。小。も。去。平。治。れ。と。土。頭。を。務。つ。て。言。れ。た。は。は。ま
 い。や。ふ。終。失。と。い。り。今。子。出。し。ゆ。急。勤。兵。衛。某。不。達。ん。と。い。ふ。や。夫。と。悪
 死。不。間。なり。我。不。對。面。を。我。對。面。の。勤。兵。衛。が。首。の。有。は。死。と。い。は。れ。て。伊。平。次。膽。を
 消。身。戰。して。中。し。け。れ。へ。腹。と。ら。い。何。と。ぞ。出。下。れ。と。は。く。に。彼。れ
 ふ。ぞ。利。欲。に。か。り。れ。匹。夫。下。郎。と。相。手。に。詮。な。れ。も。望。ま。か。い。て。は。我。我。の。い。ご
 首。洗。し。待。せ。し。と。勤。兵。衛。不。い。告。よ。と。言。葉。も。強。き。執。か。い。其。場。を。立

去。り。し。と。ご。も。伊。平。次。と。胸。づ。づ。れ。て。腰。の。わ。り。に。殺。あ。く。供。不。連。な。れ。その。ふ
 い。よ。う。り。今。又。通。り。に。決。な。れ。何。よ。う。の。事。の。人。も。知。し。ぬ。先。入。歸。り。
 右。の。次。女。は。か。に。掃。り。用。公。と。し。我。の。あ。と。より。赤。ら。り。と。て。其。夜。と。小。湊
 に。一。宿。と。それ。より。代。の。者。は。馬。が。雇。ひ。夜。と。日。に。次。で。伏。倉。へ。ゆ。り。な。れ。勤。兵。衛
 も。せ。し。く。候。子。い。と。同。じ。れ。の。事。や。く。小。湊。あ。て。相。尋。伊。平。次。の。右。の。伏
 せ。し。と。後。小。湊。夫。夫。の。仰。あ。終。失。の。令。子。出。し。ゆ。急。勤。兵。衛。我。不。對。面
 い。と。ん。と。い。悪。い。ア。ウ。レ。り。我。に。達。り。の。あ。ら。ば。首。を。斬。は。し。首。を。洗。つ。て。侍
 て。居。よ。う。の。事。夫。と。い。う。り。伊。平。次。の。あ。の。腰。を。ぬ。じ。癩。を。お。じ。我。不。連。な
 り。て。此。通。り。お。吐。り。や。は。用。公。の。れ。だ。し。の。後。と。ま。り。皆。く。お。ど。ら。て。い。く
 は。せ。ん。と。い。う。と。勤。兵。衛。と。覺。悟。を。極。め。七。度。な。づ。も。て。人。を。疑。へ。と。世。に。渡。も
 つ。ま。ほ。ん。と。伊。平。次。が。卒。亦。に。お。を。言。う。け。今。と。な。り。て。我。誤。り。此。人。如。何

つれづれのりとも。かろふに恨くやむはじと家内の者次制と其夜へ佛間
 お念佛りふ。眠も中へ妻も悴もろく空に咽る朝も成れぬ息を切
 て伊平次へ内へけいはいさあもさうさうなれば。只今宿の入りめて。にへは
 乃保をまど。達への大事と欠技まう。檀那あつて中へ立退とめり
 ども勘兵衛へ更本驚くろもろ。待間はろ。子原九津を夫魂居胴
 金化。身へ例物のおぼえの大小。黒き色の野羽織の泥も濡れと蓮葉
 ののみ笑脱く内へ入座舗おなほとへ。勘兵衛いあつて遠路の所は苦勞
 五万担者ありてやろ。所行歩ろはろを故いさわの伊平次に上
 へ御父あつてし。立腹の段はろも。所詮言まろりつてやいとも。お
 海めれまどと色の侍も二十西のりの碁盤の上へ置卒示れやかひを
 今又斯と上れも面目なし。おぼへれ通り此金も拙者が首を相をて

重くはけし。詭言とれめては堪忍くさされば。とよ肌わげのちのうら
 笈摺りけ死出の旅路の徑惟子。いごめもせと悪びれど合掌をてれ。悟
 のり後。合と後で勘弁も。おまじくよふ及摺り親を困て首は延
 此ほど西國順れも二親息文後世の菩提現當二世を觀世音に祈れ甲
 斐かれ此難儀父の命がやと入すや。我を殺してあつれと襟髪くれ上
 九津大夫が膝元おすりよん。母へちめて子に替らん。やく我はけん
 をと。最期と諱ふ親子と人心のめられぬ九津大夫の拱けり言華な
 けら。勘も情友人を押留め。所詮かろぬ其方達が願ひ我が誤りや
 發しし事。去ながらせめて迷途のかり人出に。とろふかこれ一通り聞せ
 たぐ。珍失せし金子も我が置忘れし事なれば。確言伊平治いさよふにやいも
 かつと。えはしといわれぬ。借用せしと返答あつて。娘子が動にまう返

のりし何故の所存不審さよといわれれば九津をま目み汲とらうあやれ
 ていふも恥じしむらうと決むがうり致さし元某の信田の家長子原九門と
 つ者主人信田の小太郎とのに身持放埒それ度い諫言とといども
 けい金おのりあまう人佞人讒者の言をみ用ひ某は勘當浪人の寄
 迎う。妻子や連と田舎住居され内ふ妻の病死娘一人を便あてといひ
 月日もとせう経信田家おゆり我守子原嘉膳あつれ所の家お街
 寶唐士玄宗皇帝の馬多ひ一鸚鵡の一軸何者のは業あや花道具
 ちつて等々殺し奪ひ取と家お鉄平が注進南無と寶一大事の掛
 物と尋ひ出し等が妄執をとらとせんといふと劍術弓馬のうたふ武家へ近
 寄りのひへ又怪しむと見ると時へれを捕へ詮議最中うとむはりの
 頃松橋あつ。勘藏との連お成とれ旅傍ととさや曲者と見しよりも跡

退かけ難義以救ひしが縁と形の出入見世の質物お若盗賊は仕業
 ちて入置ともめれとと。後をけられ時折く折く。かまじさお負の病
 ちては衣服の朝夕の煙の代お皆れあげ。身おはるる著ととも負れ
 ち後お持はじと貴後より射礼の金子も受納しと。勘お随ふ某の相
 ち。珍失の武拾五。修平次使あつ。ち。某が紙入お珍お入しやと珍お入
 ち。我を指て盗人といふれ斗まれ官よう。と。射の毎念さくら惜さ射放さ
 ち。潔白ふ代官所へ連ゆきと。急度流校お相お人と思ひしが待ちじ。半後
 ち。ち。依倉にゆゆれ分限我と負れ浪人なれば。ち。や掠りしか。人の推量
 ち。十が九ツ。又し涙が立しと。実名あうと。主人の恥。殊お珍失の宝詮。仕
 ち。出し。身が汚名なす。ち。ゆゆれ少事にか。のれ。あ。ち。念を忍ひ。某が
 ち。借用と。ち。ち。場へ夫と。淋せ。ち。す。ち。令子の。ち。ち。ち。ち。

思案の極め里見家へ奉るよほけり。一箇娘おはは呼床一真妙しといふ
 始終いづれも健氣なあり。父上のま誥れは難儀しつを此身は契情乃
 勤に賣。その令ふてと見合と目ふ涙とほそをえせまひと。はらひつとんを
 ふけり。てしと孝行の其子簡の親も先おあせわさけしと。夫といれ
 ねむと察し。よふと嬉しいと。存知奇くね奉り人の人を頼り幸ぬ潮来
 の蓬萊屋の亭主成田泰りれ滞留と連く。早く取らるぬ。二十あは糸
 代と替ればかり世の中に。一人の孝行な娘を愛も忠と義理いほ
 乞ふとて。に随ふは世事でおと。頓てお目にかさほせぬ。と云な
 から。是すても敵討の双紙も忠義のため再妻や娘は。川竹の流とれ
 賣。狂言奇語とかりし。今ハ我身と跡しと。かたけられと。其村の涙に
 袖も濡衣の。かた名をうけ。哀と推量われといふ声も胸ふせと。ある泪

ぶららひた武士の大丈夫はよりあられよ。入は子細はほと。あき傍も
 寔に侍の。は了簡へ遠し。の忠義はあし。してこそ細謹の顔と。から
 孝行忠義の。二人は愚が。れ町人の我多。面目も。なは合と。や。手。不。其
 これす。の。サ。念。か。ら。し。下。され。ば。と。側。へ。と。り。あ。る。折。柄。ふ。と。好。この。一。回。澄。ぶ
 ち。伊。平。次。の。う。腹。切。と。と。あ。よ。と。い。し。声。お。押。お。た。め。も。突。飛。され。間。の。障。子
 へ。踏。と。れ。ば。この。何。事。と。動。き。信。親。子。授。子。と。い。う。に。と。と。ど。む。あ。ぞ。伊。平。次。と。大
 声。お。け。足。が。死。ま。と。に。成。る。と。最。前。より。さ。ち。や。檀。那。方。に。何。も。あ。れ。か。と。
 忍。ん。で。授。子。は。立。聞。と。と。流。た。津。太。夫。は。の。ほ。を。底。無。失。の。罪。と。言。掛。られ。
 堪。忍。と。れ。も。忠。義。の。娘。子。と。な。ま。て。勤。小。賣。その。身。の。代。を。立。金。と。他
 國。不。住。と。し。つ。た。れ。も。知。り。な。い。で。し。顔。世。お。ろ。う。と。よ。小。道。な。る。み。か。り。な。は
 身。代。全。して。御。主人。へ。浪。人。と。も。忠。義。を。と。侍。の。は。と。流。入。格。好。な。り。の。と。

今ぞ始々おのひゆる生息落より土百姓の亂西親小離とハツの年この也
 家(丁彌奉公)行燈をたて居眠を叱りていらはのこりハ等見二れ十
 露盤までそんたしも皆伊恩正直りのこか目鏡小預り番頭の帳場へま
 じば。毎日のいそがし。四十に近き此年ほて。後ハ一度江戸をえと事え
 さい田舎その井の月れ蛙の推量から大海は住鯨のく後を疑つそ中
 かけいした面目な。其時ふ此首が落くらるひへのれまの抄。今檀那方
 にかやまらめ。何とらじや。右津太夫様より平比免。は悲
 と首と切てはる後。和らけ下れじと身投出せし正直その主人を困
 と後。感とれ飾り左津太夫名案を極めて刀ひり提その方が極ひ
 ほうせ。只今首討記念せよと。閃と技と二尺とす。目當遠めて測る
 碁盤六寸のりれ厚さの種れ木。二ツ小割る名能う。又ふれららと感とれ

人仁。安堵のわがひをがせ。伊平次ハ夢え。公地刀次。右津太夫。
 これとれよ。是こそいけ。唐士おあして。堯圖碁。造りて丹朱を教め。
 或ハ舜の造といふ。浮世にたれ。座隠の遊びし。一面の碁盤と天地世界
 となるといふ。本支あり心上の須彌山とれあり。二人向ふ。陰と陽。
 白黒の石とえ。眼ハ夜と晝。一角に九十目。四方に四季の九十日。ありせと
 二百六十日。一日ハ送れと知らぬ。愚らよ。今主君の大事に終て。圍
 碁。手談と小。了。尚棋盤。又号て木野狐と。王介甫が詩ハ聰明英
 智の君子だも。勝負小餘念なれ時ハ人を惑つと博奕。嬉戯。ほてや老
 人。後。の忘却。さう入る。夫に代らんと。それ妻ハ貞心。子小孝。のり。忠義
 を。あ。番頭伊平次。四人と四方の碁盤。小な。二ツ。切。此上ハ武士の
 意氣地と立。なり。は。家内の。何ふた。人か。は。斯め。上

忠孝傳及所志卷之三



と行時もそや。ほ息女が清出し贈りさけしはさしと。勘兵衛がさるる
はうせお蔵へ用意の令子不足す。又著替の小袖一かき母のこゝろ
付はして供一人ふこれをさくせ。翌日の日れ出乃鹿嶋ならし。潮来とど
ていそげぬ。

諷

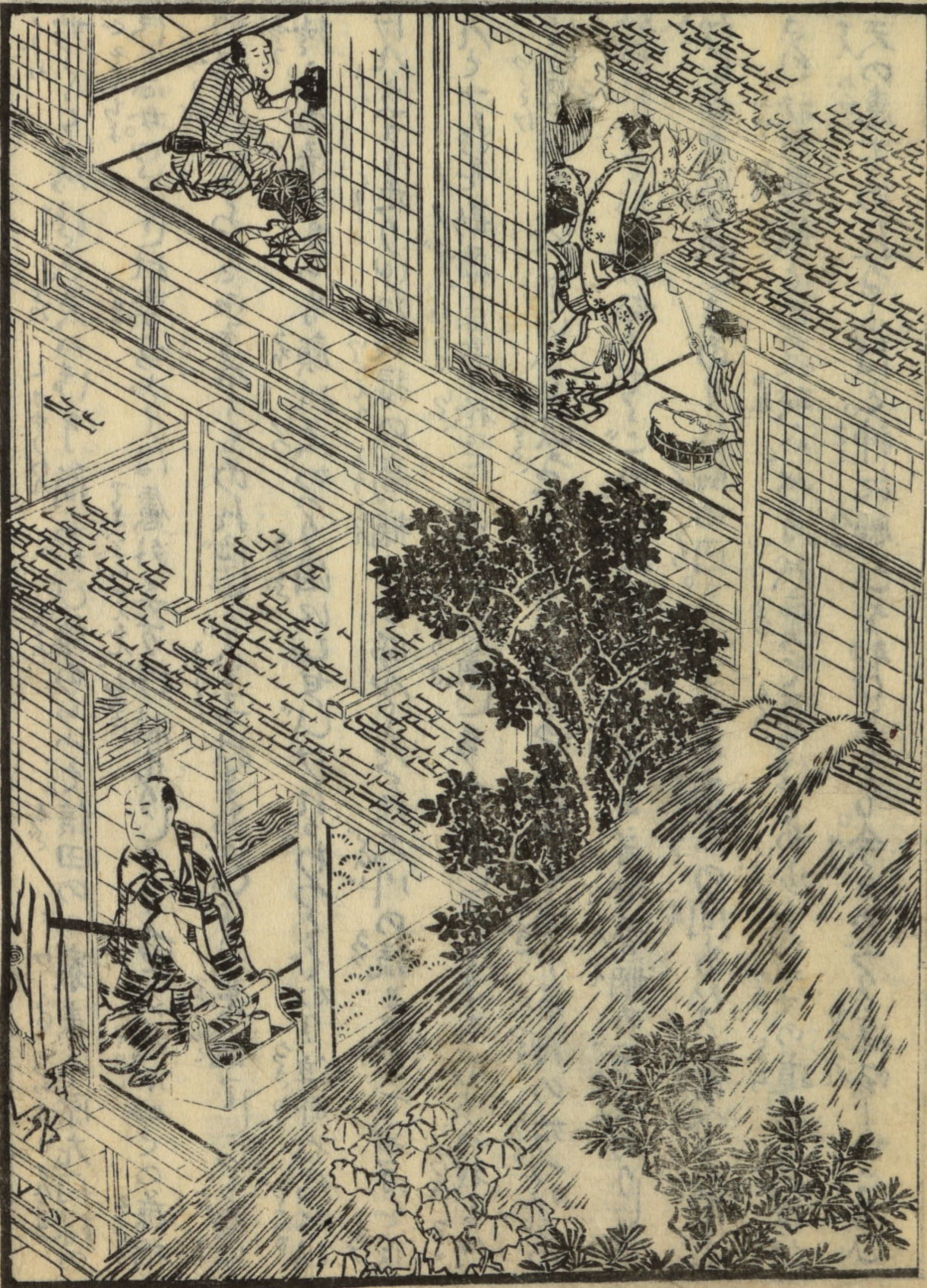
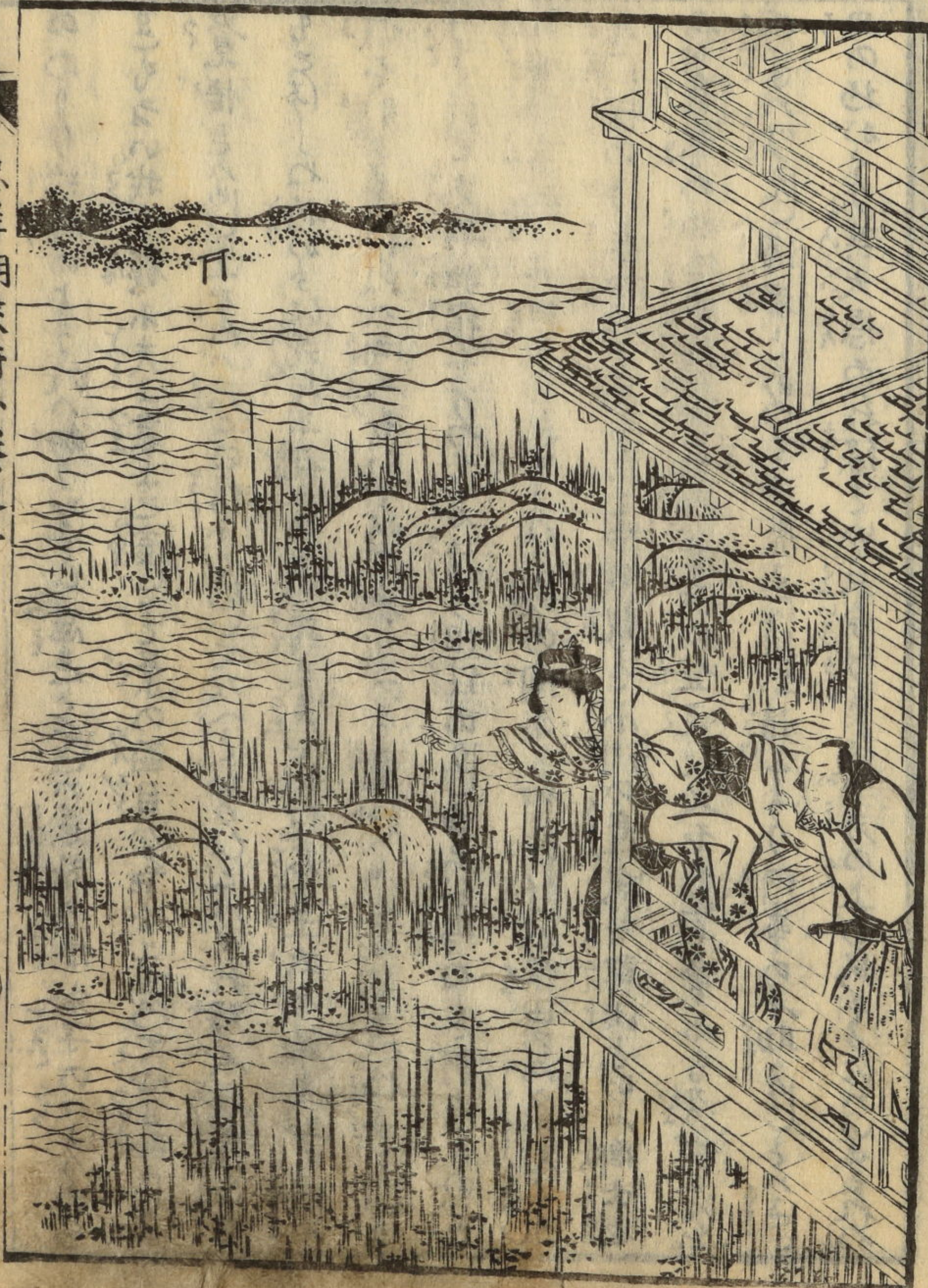
さ返代康島に神めれまは達せ玉(や今一度。

詩の序に日舟次門前。維て客次河中に逢と遊女をばして浪の上。これ
くさるれ遊女も頼む人あなのためれぬ。いづれ船の着ごころふこそ往古
よりのゆえけ。粵に常陸の國潮来といふ船はさし向ふ北須賀の某師
堂又之波る阿波山安徳寺を常陸坊海尊此開基とかや。尤もに浮洲の
明神の杜。遠小香取の浦。こゝろは鹿嶋の大船戸。しほさるか小筑波山加
波山芦穂日光山。ふはる川。水名野川。小かん川。利根川。小落と。流と。

と清の銚子の海ふ入れ。九十二里不の入海あて此所まで潮来す。ゆき潮
来と稱とかや。されは悪風ふ赤く船の又の漆玉臂千人枕。朱唇万客嘗
といやも誠願にあり。男といふ。只一人世して足契情のほむなれざし。
粵に九門が娘お磋磨を過。比勘藏を見初。よまむむらにさる胸
と人知れぬ。おひやるぞと芦垣の中。にるぞうかれ船浪の枕もさる。舟
幾瀬。それを越路の親ま。しに里見の家へさるも。さく帰す。さるる。さるる。
須磨代と今。かから瀬を流。れはにれ。其日。れ。調子。弾。之。強
の小調。も鹿嶋の神を祈る。なれ。女。さる。海。を。不。便。なり。か。て。勘。兵。衛。と。船。不
さる。経。る。い。この川。さる。ふ。さ。け。且。船。人。の。し。つ。も。知。れ。船。中。に。あ。ぐ。り。
蓬萊屋と。同。へ。あ。ぐ。て。案内。あ。て。さ。る。先。立。か。の。橋。上。に。同。伴。ま。ら。見。立。あ。る。
さ。し。とい。ふ。も。社。君。を。の。く。并。中。に。須。磨。代。へ。勘。藏。を。見。え。り。聊。ら。あ。

てなまうれる。何が扱大恩のれ。九津をま棟のの息女鹿畧にいとをいれは。
 附よ私親勘兵衛も面控いこされ。漸言葉をはししての上御納得るん
 志ゆゑありし。只しま並に身清の令相けし。伴ひやを形り。此者留あり
 合のふされど。母よりほりすれと先出せは。須代と飛立をかりれ。ひあく。
 かの小細おけい。扱を父よも。侍得公ありし。や。そのふをさうくと
 何とぶか。ん。や。交度い。と。ぼし。商人の妻と形れ。侍連る。衣装。柳并
 も何りせん。是ハ新造の明石への。金土産。髪も。造。さ。ん。と。ほ。び。し。と。ま。
 棟おほ。ほ。び。あ。ん。と。私親あ。ん。と。ん。せ。と。定。と。お。恨。あ。れ。と。と。と。彼。足。業。
 ほうり。居。る。中。父。さ。ば。や。は。足。い。や。く。何。と。と。う。み。や。ひ。ぼ。し。舅。ハ。親。勿。辨。る。死
 事。か。る。我。親。も。得。心。の。ふ。な。れ。と。や。ひ。身。の。妻。なり。それ。ハ。隔。心。が。は。く。と。ま。
 成。は。れ。慇。懃。さ。れ。言。葉。た。ど。打。解。て。語。り。ま。と。と。ば。に。奇。添。け。と。ば。勘。藏。と

始く。後。ぼ。と。夫。ハ。侍。了。簡。ら。か。ひ。誰。あ。ら。ふ。ぞ。信。田。の。山。家。来。千。原。九。門。様。の
 侍。息。女。は。こ。じ。れ。妻。あ。と。は。慮。外。子。万。涉。救。あり。と。り。あ。せ。ハ。我。亦。か。この。兼。相
 の。侍。詫。い。ま。お。と。い。さ。ん。も。あ。れ。ぼ。と。令。子。れ。ま。ら。び。より。事。記。し。し。ら。ぬ。始
 終。その。侍。ら。も。顔。れ。笑。か。り。泪。に。い。せ。び。け。れ。が。わ。つ。と。む。かり。泣。卧。ぬ。何。あ。ひ
 けん。立。く。走。り。ゆ。板。椽。の。高。欄。より。ほ。ん。な。れ。大。川。の。流。き。と。と。で。身。を。投
 ん。と。す。れ。を。勘。藏。周。章。抱。こ。と。め。と。狂。氣。し。ま。ふ。と。し。あ。や。ま。ら。あ。ふ。ハ。我。を。何
 と。言。訳。い。さ。ま。じ。と。し。を。涙。あ。ら。今。は。ら。い。あ。も。恥。じ。や。過。一。畢。月。の。始。つ。か。何
 かの。礼。と。て。お。出。の。婦。と。ご。の。仰。に。我。親。へ。不。束。な。身。を。誓。姻。の。相。泣。あり。し。泣
 け。し。あ。え。に。う。れ。さ。あ。ま。胸。の。内。ら。は。く。と。奉。と。の。間。も。な。く。宿。へ。よ。び。ま。と
 され。祝。の。難。儀。と。の。れ。故。不。此。身。以。賣。て。夏。は。と。あ。少。ハ。孝。の。道。あ。も。か。る。ひ
 天。の。恵。も。あ。れ。ま。ん。ば。と。神。に。願。ひ。を。か。け。ま。く。も。今。日。わ。ら。う。達。娘。と。や。と。さ。ひ



のゆかり始終のようは知りながら忘として悪路の闇女子のようあら
まもろい我を顔不夫よ妻よと言し一葉の面目なやとて居て心配りく
覚悟さへし上られ只らの怪ふしてなべとおひこんされ婦人脱兎面て
もとほしね折かすに死ね不及のねまら待と声かけ亭主太兵衛立物て頃
代を引とめけれハ兩人もかき解く解くこの氣けりふことなけれ板子といは
せしれそ先列秘宿をりて身清の相法ありゆえ公得ねと馴染みあはね
初會の客何れ子細もゆれ申すと次の間ふうかひは信田の家老お系
左門様の消息女にくあはしとや我親と小川の産襦井群治といふ御士也
あか鹿寫の西塔祭れ折うら行違ひの喧嘩に人をあやめ命あも及ぶを
相手へせし溢者とあつて子原をばれお情あより何事のお助りしとに
母の抱かくり其大恩おれ縁といひ只今せしれお身の上おはるははしとされね

にかりひなれ悪路も面目なり死んとすれハ女の氣隨はことしは伊むの至りあり
又勘藏とのあも子原様の抱かひにさるをば存なれば不持りのと名を
てい實儀も立とそれゆゑ返事もなれ是も同理とあつて今頃六代
が身に怪我あははぬれ言次あははし先當つて我ホが迷惑ナリが了簡
れつし所をば尋見るとてもおひきりね事なれば月日さして忘れ苦
あつらへおろふ悪路の目當遠くも夫と違嬉しはる落のさけ成打明し跡を
面目なりあるに死ねえ悟ハ女の情こや言葉あはれねまら契情買の
情あ至りてはと代相恩の主人もせよ成とされ肉のうかれ女控女知れ後
などい客もあははして初會れ一夜妻氣にけねと言れてハ女郎の顔がた
ねといふのそと立れが粹な客身清といふも沙汰をくり令ととて縁を此
方の代物何れはし小沙客くらとあらんと劫とて黙ちて答もたうりけは

叔をいよく得かたなり。尤あふ此方事も清の愛習。多とこがみの山積
 とも。須磨代を相談はうりなり。ね。お帰あれと木と切く投出と言葉も勤
 延縮なり。ね。尚坐の利づめ。然らば其意に任せと打ちつけ。ほびて懐
 中より一札取出。是を須磨代が年李證文恩あれ人の胤なれ。金子さ
 どにほろを所存なれ。最前よりれようすとい。おささかま。清親父母も
 双方へ義理し。は。身の代令。貳拾五。半年飾り。此其うらに勤大事め。て
 くれ。餞別又貴殿より。れ。柁代も過分にあれ。清。さ。ね。翌日出立の其時
 も。こ。落付此。禮文と。須磨代小渡。一人か。ま。と。り。直小座舖へ。は。い。襖
 と押立。欲をこ。な。れて。義を磨。こ。ほ。の。粹の魂膽。お。枕。あ。ふ。が。れ。屏風。は。ら。
 如何なれ。夢を。や。待。が。ら。ん。

諷

待がほら。い。別。さ。が。ら。い。侍。ま。い。わ。れ。が。か。へ。ら。う。ま。よ。

叔もおあ。ま。お。は。を。は。い。我家へ。ゆ。り。潮。来。ま。て。の。根。子。蓮。菜。屋。の。太。兵。衛
 親。も。常。陸。の。國。小。川。の。産。橋。井。群。次。と。り。者。ま。て。子。原。九。門。と。り。情。り。
 余。以。助。け。ら。道。し。者。れ。は。身。の。代。ま。ら。ぶ。は。し。と。り。け。れ。代。金。五。拾。五。出。し
 ぬ。ん。と。せ。し。所。過。多。なり。と。て。清。ど。漸。く。貳。拾。五。お。ま。を。連。り。し。と。語。り。け。れ。を。
 二。親。も。蓮。菜。屋。が。男。氣。な。れ。る。ゆ。感。じ。ぬ。お。は。何。の。礼。を。述。り。其。行。我。と
 り。又。艶。し。れ。を。え。る。こ。つ。つ。夫。と。知。れ。ぬ。勤。我。再。妻。合。せ。た。く。夫。婦。の。相。談。し。
 何。事。も。房。列。へ。ま。り。届。け。れ。上。ま。と。勤。兵。衛。と。い。ま。小。湊。へ。ま。り。九。門。達。
 お。返。書。を。い。じ。て。し。ま。う。誠。小。加。孫。が。れ。治。事。出。ま。る。れ。も。因。縁。と。か。や。う。の
 さん。それ。お。付。ても。お。は。どの。我。お。方。れ。嫁。小。貫。ひ。り。や。此。上。の。入。魂。兩。降。つ。て
 地。か。へ。ほ。れ。と。や。り。何。事。は。相。談。下。され。と。有。り。ば。毎。度。の。仰。か。と。志。し。は。し。さ。り
 形。が。ら。其。え。ま。の。富。家。某。と。ら。浪。人。の。ま。か。れ。ら。じ。な。れ。が。加。様。か。る。る。ま。あ。れ。



縁成阻と世の人も残念なり。此後ふもしてハ寄友もほひのりてとせり。娘ハ側ニ勤兵衛が言ひて世ハ耐叔と誇りの神れ引のりせと。又ひはじか又も得んた言葉親と親とハ二つてカも落てそ良の事や折もたのじと之れ采采より胸をこがす人例の氣質成るゆゑ。勤兵衛と又折とめればと。其旨はゆるね奥でその後お礎磨と勤藏とて忘れたれと親のゆじなれば所詮連添のりハ叶はじ。尼法師もあつたはと。あひが借とりひもらせば老れ親子随ふこと孝の道と夫より心を取直。山子登りて木を推海濱に釣をたし魚成得てこれを賣或ひを網引田畑の手付の日雇に出りつれば價とつて父成養ふ便りじとればりや。柳の髪も揺らど紅粉小遊ふことばはしけれと生質とありたふや。酔狂の漁夫野人のつて袖褻ふすつて戯れどとれば親の指南おし捕

手柔の術成りつて投倒。狂氣の真似をく匂匂けしは時々發る氣を込てかけて怪我を被るとして名をへおれ溢者も。その後を除と通。つるさか。勤藏も此事不のふびて。ひそく母お語りけり。其公根也不便る。み成心お被憂が方へ。とりく令子成送り。月日も過けれ。日。勤藏の風のころして。それより病日に重了。医者亭菴の見立も老人のゆかれ。此度ハ大切なりといじ事。房別へ告げ者おれふより。み原もそのら不通同前にうちさうたが大病とて歩捨訪されも本意は。今日で終ぬ。ゆとやとあり折や。依倉より使として勤兵衛や被りた老病に。その最早生前の浮對面これ陽りと存るにつれ。何とぞ出下されと。早速支度して。多た依倉ふより。内の様子もあつた。奥へ通りなれば。屏風成引廻。勤兵衛が妻と。その対に打たはれ。勤藏

得とて多し主の病体いふやと守ふ。さればそのふにこそけかりそめれ
 病とて下のはり。次第に弱て只今往生いじたり。此れどより勤ま精進
 守ふのひまにも何とて一度御目にかきて。や上とらるればありとやせ故
 迎ひの者けりせ。今少しとやうと恨せ。けり顔みえなり跡と涙お袖
 濡ふ。こゝ残てまや某ふや度と有との後遺言もあつじけられたる。
 今への枕に遺言に外の事なるもいふと先達くまの世し。将が縁組るふねと
 わりし一言と石よりかといは。氣管。この方れ鹿相ゆ急。ありひもあつね憂は
 とあそ。おふはぶのにさほし。身修ふなれと其上に賤山ろのふ業して孝
 行けくまとくこれ。唇を耳に百子鳥せても。吐らね縁なれど。じや未だ
 この願ひ何とぞか。あふさうは。未来の常佛いことと。うれ。頼りや
 重といふ言もあふ。舌もさうれて往生といふも。涙おひせひなれど。じも我強

れ子原九門眼も。養れを信じて利欲を合身。我相法と世の人にも恥し。く
 請からぬハ武士の意氣地。それほどとて。いふれ。是にけけても。娘が孝行。
 何れもいふと。身と捨て。朝夕かせぐ公のうら。さそ恨めしくも。おひは。今
 更とては。恩愛の情といふ。の。知ら。手前勝。まといふ。おな。勤ま。傍
 後の。遺言の。おも。い。さ。兼。知。い。じ。成。は。娘。が。進。上。り。は。と。ま。お。娘。一。や。その。法。云
 業に。遠。い。お。れ。や。刀。ふ。か。り。て。虚。言。は。し。な。ぬ。あ。り。が。や。亦。な。や。息。あ。れ。う。ら。ま
 勤。ま。掛。が。其。一。言。は。つ。な。ふ。は。さ。ぞ。や。ほ。び。し。は。ん。と。い。ふ。声。が。り。て。屏。風。の。内。ま。し
 イヤ。ま。ご。死。ね。と。立。出。れ。ハ。主。の。勤。ま。精。進。丸。め。法。解。安。と。れ。い。と。を。か。り。明。こ。は
 因。が。れ。も。せ。ぬ。此。場。の。あ。り。さ。は。ふ。が。お。ひ。ま。て。居。り。け。れ。勤。ま。精。進。も。あ。つ。と。合。て
 り。の。後。所。詮。容。易。に。は。得。公。を。め。れ。は。と。病。氣。を。幸。ひ。刺。髪。い。じ。妻。も。お。郎
 と。い。ぬ。く。町。人。の。謀。首。尾。よ。う。ら。の。ひ。婚。姻。も。は。り。知。あ。つ。く。満。足。い。ま。し。と。



志孝傳所成志卷之三



志孝傳所成志卷之三

十九

一乳とれば子原もお笑誠に武士も及びぬ計畧張良孔明こそ内うこれ然膽
 と狂言奇語どもおもつれど此上の不調法なれ娘ひとふお頼りあさかを某
 とても木の股から産もいととねと言葉すく形小姫同士こそほひつけ虎溪
 の三笑次の間より伊平次が宝にのせ鬨斗えぬ勘藏をほひ出けはば
 跡よりとろふ鉦子ほりた下女小若母いそれもで勇候酒宴の最中葉内
 小はれと下郡鉄平切戸により庭にまどはれた小湊へ入りし所足小出とら
 ろつり早速小ありなるといふより夫氣はくひ爰元小遠慮へし松子
 いうちと向けはばはれはれ終失の勢若れ一軸今小知しはれ其中に御主君
 信田の小太郎様ゆき也兵門とてつと契情を連りづくへう立退のりゆ急倭
 肝邪智れ薩嶋兵藤太かの宝の終失も皆小太郎がなとつと風をさせ
 家國を奪ふたくみの段々忠義とてと浮嶋大八様もそくに拙者かす結

と今事候所一家中大半一味の倭賊われが頼とく浪くしと
 子原九門忠義と志とれ魂のり此事かきせよとのけ使委細と定めと状
 箱をばし出せぬ穿く間ほと讀終り扱と流良雲八の行方あれどや残念
 されへ去年鼻月の始め大和田の原にかりてあやむもつうねあんの圍らつと
 又へ其顔と流良雲八のうじと地といふ内にかと鞘に納しはあめあらし
 見づりし月れ光るる劍の威徳ういふかれ名他所持なると事あやさ女取捕
 て詮義うさば一軸の有かも知とんといふ鉄平いふみとら警ば雲八天
 かつ地をくられとも尋出骨と挫く白状とせん氣はうひるさと言と健
 氣によもりしとら我も古主の一大事浮島に力とそつと返事とあつと
 候しけれ取ももとや鉄平の大八方へあつと夫より勘兵衛と結納乃
 取揃へ馬舟付九門を是にのせと小湊へ送りして勘藏と漆塗りし

善といそげと其馬にお遊磨をよめとく嫁入の輿車にせぬるんも
ほびぬ。

○千原左門娘瑤磨親の為に身を遊女賣その釋明らか清出直じ
父婚姻をいそむの言葉にあらがひ又辛勞して朝夕を養ふ至孝此徳也
仍く未だ夫婦となりて家富榮ありて天道の恵よかり所也潮來郎の
此瑤磨が諷ひ初めれ事には有りけん。されば音律ふかると南郭先生の
歎息の詩あり。此所の方言に傍輩女郎を誰ぞと云客は對し
お客様といふを。お客様といふを。彼磨と須磨代といひかぬ
らと。此風余國めてうらなひを。はよはらふといふも是可う也。

忠孝潮來府志卷之三終

